

二月堂のお水取りと紅花

奈良東大寺で毎年行われる「お水取り」は1250年以上の歴史があります。お水取りの際に二月堂の十一面観音に捧げられる椿の造り花の花弁には、紅(ベニ)で染めた深紅の和紙が使われます。深紅、白、クチナシで染めた黄色の3色の和紙を組み合わせた造り花を、椿の生木につけて飾ります。この椿に使われている紅は紅花染めであり、白鷹町の紅花が使われています。紅花音羽屋の紅花もこの美しい椿の花になっているのです。とてもありがたい気持ちでいっぱいです。椿の花を染めているのは染の大家であられる「染司よしおか」の吉岡幸雄先生です。



紅花音羽屋 ホームページより転載しました。

代表 石井 美由樹

〒992-0832 山形県西置賜郡白鷹町荒砥乙892-1 TEL:0238-85-6241

紅花音羽屋は、無農薬紅花を生産しお肌に良い紅花スキンケア製品・食べて良い紅花健康食品・染めてお肌に良い紅花香黄染め染色品を制作し販売しております。

<https://note.com>>染司よしおか より

冬の紅花染め、お水取りに和紙の椿

お水取り椿の造り花のための和紙染めが佳境に

東大寺のお水取り(修二会)のおりに十一面観音にささげる椿の造り花のための和紙染めが佳境に入っています。

一日3kgの紅花を水に浸けこみ、翌日、黄水洗いをして、藁灰の灰汁で揉み込んで赤色を抽出し、米酢を入れて木綿に染め、それを再び少量の灰汁に入れて濃い紅色にして、次に烏梅で発色させます。

翌日、それを羽二重の上に流して、その上にのこった輝くような紅の泥(艶紅)を集めて、和紙に塗ります。

4~5回塗って濃き紅にします。3kgの紅花で和紙がようやく3枚染めあがります。



紅花の黄色の色素を洗い流す



紅を和紙に塗る



和紙を吊して乾かす



完成した染和紙

鮮やかな紅花染め佳境

工房では、京都府綾部市黒谷という紙の郷で漉かれている椿手漉和紙に、椿の花の色にふさわしく濃紅に染めたものを六十枚、白を六十枚、そして花芯になる黄色を支子の実で三十枚染めて、東大寺に納めることにしている。

二月二十三日は、試別火(ころべっか)という修行期間のなかの、花拵えの日である。連行衆と堂童子と呼ばれるお手伝いの人たちが円座になって作業ははじまる。

花の芯は、タラの木をけずって長さ三センチほどの五角形に整える。それに支子(しし=クチナシ)で染めた黄色い和紙を細かに裁ち目を入れて巻いて花芯とする。

これに紅花染めの赤三枚と白二枚の花びらのかたちにした和紙を交互に貼ると、椿の花ができあがる。

